

言の葉の鎖

小林守城

無縁になれば自由になれる
懐かしい他者はすでに疎ましいと
それは心地よいそよ風のように
忙しい街角や職場に忍びよる

身軽な一人の病室は
既に見えない他者に囲まれ
孤立を恐れるスマホの中では
暴虐のことばを荒ぶるだけだ

騙されていたことを知って
なお正直でいられようか
悲しみを裏返した憎しみの鎖
絶縁の果てのヘイトスピーチ

働けば自由になれる

ARBEIT MACHT FREI

アウシュヴィツで盗まれた人々
その粗末な鉄の文字板を盗む奴よ

花咲くいのちの鎖のなかへ

言葉はなんども帰ろうとする

鳥たちの合図や愛の囀りは
いつも変わりなく正直だ
手に負えぬ地震や嵐のとき
言葉はむしろ鎮まるものだ

他者や世の中が荒めば
独りの言葉も泡立ってくるものだ
その波立ちに碎ける言の葉の群れに
卑怯であることを拒む骨さえあれば

言葉がたやすく詩を蹴破るときは
人に見えない盛り場を過ぎて
つつましく口笛を吹いて出て行こう
その文字や言葉の底を掬いだすのだ

フクシマを経てもまだ痛む言葉よ

逆さまな絆に気付いてゆけ

詩は雨の真言 生死の中の雪

誠の文字であらねばならぬ

花咲くいのちの鎖のなかへ

言葉はなんどでも帰らねばならぬ